男性的人生論

立原正秋

傍観者になれない人生とは、
公正な視線を貫くことである。
そのためには、賭けた夢も潰え、
もちろん出世は望むべくもない。
しかし、この公正な視線がかち得るものは、
無償の行為である。
そして、自分が成しとげた
まことの男の仕事が残るはずである。

角川文庫

だんせいてきじんせいろん
男性的人生論

たちはらまさあき
立原正秋

角川文庫 3712

昭和五十一年六月十日　初版発行
昭和五十五年四月三十日　八版発行

発行者——角川春樹
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話東京二六五—七一一一（大代表）
〒一〇二　振替東京③一九五二〇八
印刷所——厚徳社　製本所——本間製本
装幀者——杉浦康平
落丁・乱丁本はお取替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0193-129810-0946(1)

男性的人生論

立原正秋

角川文庫 3712

目次

傍観者になれない人生　五
男の勁さとは何か　一八
男の自制心について　三一
指導者の在り方　四三
勇気の容　五七
遊びのさまざま　七二
放任と制約　八五
左手の発想　九八
文化とは何か　一一三
父親の肖像　一二七
公正の在り方　一四二
酒の飲み方　一五七

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

スペインでの発想　一七四
単行本あとがき　一八〇
解説　金子昌夫　一八三

傍観者になれない人生

はじめに断わっておくが、この一文は、世を慨嘆するために書かれる文ではない。私には思想とよべるほどの観念形態もないし、ましてや、思想に殉じる、などの如き行動もとれない。これは感想文である。あるいは随筆である。まずこの事を記憶にとどめておいてもらいたい。

男一匹。俺は男だ。男なら起ちあがれ。こんな言葉を私は実にたくさんきいてきた。男のまずしさを表現している言葉にしか思えない。男が、俺は男だ！　とさけんでみたところで、そこからはなにもはじまりはしない。その男が、鋼鉄にもひとしき魔羅を具備しているのなら、なにも言立てて、俺は男だ！　とさけぶ必要はないわけである。したがって私がここで男性的人生論などのごときつまらない一文を草するのは、更におかしな事だが、これは編集部の案である。それだけ現代社会から男性がすくなくなった証左だろうか。この一文は、いちおう連載のかたちをとるが、数回で終りになるかも知れない。そして、たぶん、つまらない感想文になるだろうから、俺は男だ！　と自己を信じきっている男は、読まれるのをここでおやめになられた方がよい。

むかし、明の儒者に王陽明という人がいた。俗間伝えられる知行合一の思想の先祖と看做されている人である。知行合一は格物致知とも称されているが、私にはよく解らない。知る心と行なう心に二心はない、という思想だろうか。心即理は実践主義である。最近この思想を実践した人がわが国にいたそうだが、これも私にはよく解らない。わが国でこの陽明学を信奉した人に、熊沢蕃山、中江藤樹、佐藤一斎、大塩中斎などがいるが、史書による実践主義者として私の記憶にあるのは、天保の飢饉の救済にたちあがり、蔵書を売って窮民を救い、兵を挙げ、敗れて焚死した大塩中斎である。この人は英雄ではなかった。自ら英雄たらんとしたこともなかった人であった。ましてや自己顕示欲などまったくなかった男であった。大坂町奉行所の与力として三十八歳まで勤め、その後、隠居しながら、しかし自ら歩む道に傍観者になれなかった男であった。彼の挙兵と焚死はまさしく無償の行為であった。彼の焚死は、似て非なる死ではなかった。

大塩中斎が暴動をおこした原因について、もろもろの史学者が臆測しているが、私が調べたかぎり、その原因は、天保の飢饉である。天保四年、出羽に洪水があり、それが影響して江戸では白米が百文で四合しか買えなかった。文政の頃は百文で三升買えたのだから、たいへんな騰貴である。ところが、天保七年になると更にひどい事態になった。この年は作付時の春が寒く、雨が続き、洪水が各地で起り、白米が百文で二合というまでになった。当時、大阪は、全国の生産物

の集散地であった。したがって全国のどこかで洪水がおこれば、たちまち市場の値の変動に響いてくる。米屋が米を買いしめ、役人や富豪は飢饉をよそにのうのうとしているのに、賤民は二合の米すら買えない、という事態に、大塩中斎は憤った。森鷗外もその作〈大塩平八郎〉のなかでこれと同じことを述べている。ここで彼の文を引用してみよう。

若し平八郎が、人に貴賤貧富の別のあるのは自然の結果だから、成行の儘に放任するが好いと、個人主義的に考へたら、暴動は起さなかつただらう。

若し平八郎が、国家なり、自治団体なりにたよつて、当時の秩序を維持してゐながら、救済の方法を講ずることが出来たら、彼は一種の社会政策を立てただらう。幕府のために謀ることは、平八郎風情には不可能でも、まだ徳川氏の手に帰せぬ前から、自治団体として幾分の発展を遂げてゐた大坂に、平八郎の手腕を揮はせる余地があつたら、暴動は起らなかつただらう。

この二つの道が塞がつてゐたので、平八郎は当時の秩序を破壊して望を達せようとした。平八郎の思想は未だ醒覚せざる社会主義である。

森鷗外のこの判断は間違っていないと思う。さらに鷗外は、中斎を「米屋こはしの雄である」とした。これもほぼ正確である。中斎は陽明学を奉じた哲学者であったが、著書には〈洗心洞劄

記〉があり、その著でみるかぎり、中斎の哲学体系はそれほど鮮明ではない。

ただ彼には生れながらにして具備していた公正な視線というものがあった。この視線がのちに暴動を起す原因となる。この意味で、公正な視線は無償の行為そのものである、と言ってもよい。彼は、四十歳の夏、近江国に中江藤樹の遺蹟を訪れている。藤樹はわが国における陽明学の祖である。彼は、学問における才智や博識よりも、徳を重んじ、孝を道徳の大本とした実践家であった。中斎が近江国に藤樹の遺蹟を訪うたとき、どういう心情だったのか、後世のわれわれは臆測するしかないが、おそらくは、才智よりも徳を重んじたこの先達に、中斎がなみなみならぬ関心をよせていたことは察せられる。藤樹の弟子の熊沢蕃山は、備前の池田家に仕え、のちに幕府に忌避された人だが、この陽明学者は、経済論、宗教論に具体的な説をなした。その意味で蕃山は学者であった。

ところが、中斎は学者としてとどまれなかった男であった。数え年四十五歳といったら男ざかりである。しかも家督を養子の格之進にゆずり、隠居の身である。弟子に陽明学を講じておればよい身分でありながら、何故に兵をあげたか。中斎を論じる場合、この一点を見逃してはならない。暴動の結果がどうなるかは、かつて与力を勤めてきた身にとり自明のことであった。最後は、塩詰にされた屍首を磔柱、獄門台に懸けられている。

彼は米屋こわしの雄であっても、暴動の後の具体的な政策はなにひとつ持ちあわせていなかっ

た。当時の全国の米の石高の配分を見ると、

	単位万石	全国百分比例
徳川幕府	八〇〇	二九・二
諸大名	一九〇〇	六九・三
御料	三	〇・一
皇族と公卿	四・七	〇・二
社寺	三〇	一・二
計	二七三七・七	一〇〇

となっており、一与力出身の陽明学者が、この配分をつき崩せるはずもなかった。彼は役人を経験してきて、政治のちからを知っていた。しかし、飢饉にさいし、役人、富豪と賤民の差を見すごせなかった。このときの彼の怒りは、単純率直であった。怒りが政治のちからにまともにぶつかって行ったのである。そして暴動というかたちに持ちこんで行った。具体的な政策は持ちあわせていなかったにしろ、結果から生じるなにほどかの改革は期待していたのかも知れない。ここに彼の無償の行為がある。彼は陽明学というおのれの思想を売物にはしなかった。公正な視線

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

に支えられた男に自己顕示欲などもあろうはずがない。いちばん大事なことは、彼が賤民を知っていたことである。

陽明学の真随が、知る心と行なう心に二心はない、とすれば、大塩中斎は、それを実践に持ちこんで、よわい四十五にして傍観者になれない人生をまっとうした男であった。観念がさきにあり、その観念にしたがって行動をおこす、といったかたちではなく、かりに彼が陽明学徒でなかったにしても、彼は天保の飢饉に起ちあがっただろう、というのが私の考えである。

しかし、いくつかの疑問は残る。なぜまわりの者を事件にまきこんだのか。中斎門下生はいいとしても、挙兵後敗れて中斎父子がひそんだ油懸町（あぶらかけまち）の美吉屋（みよしや）という手拭地（てぬぐいじ）の仕入屋美吉屋五郎兵衛、その妻つねは、中斎をかくまったかどで、五郎兵衛は獄門、つねは死罪に処せられている。この夫婦は、大塩家に出入りしていた商人だったというだけで中斎に利用された。追いつめられた暴動発起人の心情としてこれはわからなくもないが、しかし最後の一点で明確でない歩み方をしている。

傍観者になれない男の人生として、私は江戸後期の一陽明学者について簡単に述べてきたが、しからば当世における傍観者になれない男の人生とはいかなるかたちがとれるか、について考察してみたい。

勇気という言葉がある。勇気とは物に恐れない気概、あるいは勇ましい意気という意味だろう。しかし私は、いわゆる勇気ある男という表現を好まない。これはまことに俗な表現である。勇気ある男とは、私が最初に述べた、俺は男だ、と同じ意味である。まことの勇気とはなにか、私の偏見によれば、公正な視線をそなえた男こそ真に勇気ある人間である。公正にたいして弱い、という事実をまっとうするためにはどれほどの勇気が要るか、あなた方は考えたことがあるだろうか。しかし、もうすこし退って考えてみると、公正にたいして弱い、というのは、人間の良心の根本である。

ところが、これが守られていないのが世の中である。守れないのは政治性が絡んでくるからである。どんな世界に棲もうと、まったく政治性をぬきにした人生は考えられない。したがって、ここで考えられるのは、どの程度政治性から自己を守れるか、という一事である。政治家ですら、おのれの政治を守るために政治性にたいして防禦の姿勢がとれるのである。

ところで、政治倫理の規範からの現実政治の解放を唱えたのは、ルネサンス期イタリアの政治学者マキャヴェリであった。彼は自ら政治家として動き、その経験から近世的な政治学を創りだし、国家観を打ちたてた。しかし、同時に、その権謀術数は救いようがなかった。いわゆるマキャヴェリズムの名称をうんだ先祖であった。しかし、なにもこれは政治の世界に限ったことではない。あらゆる分野でマキャヴェリズムが当然のこととして通用しているのが世の中である。こ

のマキャヴェリズムに抵抗を感じていた青年が、としとともにマキャヴェリストに変貌して行くのもまた世の中である。

男が学校を出て大会社に勤めはじめたとする。大会社で仕事をするからには、当然そこに権力への志向があらねばならない。マキャヴェリはその著〈君主論〉のなかで、国家権力を伸長するための統治技術を論じ展開したが、これとまったく同じかたちが大企業に身をおく男にもあてはまるわけである。ましてや、枝葉のように細分化した社会の現代を生きぬくためには、マキャヴェリズムにまきこまれざるを得ない、ということも考えられる。ここが問題である。男の夢と、それにともなう出世への志向のために、これは単に技術的な問題にすぎない、と割りきってしまえばそれまでである。将来、夢が実現し、ある程度の出世をしたとき、この男は、青年の頃、単に技術的な問題にすぎない、と割りきっていたかたちを、今度は無償の行為に転換させられるだろうか。この男の仕事の意味が明確になってくるのはこの時である。

かつて藤原銀次郎という実業家がいた。戦前、この人は、私財を投じて藤原工業大学を建て、のちに慶応義塾大学に寄附し、今日の同大学工学部の基礎を築いた。また近くは倉田主税という実業家が何億という私財を研究機関に投じている。功成り名遂げた人の遊びである、と言ってしまえばそれまでだが、しかしこんな高級な遊びをやれる人が現代の日本に何人いるだろうか。この二人の実業家は、傍観者になれない人生を歩いてきた、と断じてまちがいない気がする。先年、

ある女の流行歌手が赤十字に寄附をして功労章をもらうのに皇后に会えるか会えないか、などという実につまらない記事を雑誌で読んだことがあるが、この流行歌手の寄附にはまったく意味がない。藤原氏が工業大学を建てたのは必要に迫られたからであった。倉田氏が金を投じたのも同じ理由からであった。

この二人の実業家は、工業国としての近代日本をともに歩いてきて、さらに日本が工業国として発展して行くためにはどうすればよいかを、身をもって実行した男達であった。ここでは出世と無償の行為が表裏一体になっている。彼等は功成り名遂げても傍観者にはなれなかった。出世がそのまま無償の行為につながっていた、と言ってもよい。

ところで、傍観者になれない人生にも、一方に　これまで述べてきたかたちとは別のかたちがある。かりに、ある乳製品会社がおこした砒素入りミルク事件をおもいおこしてもらいたい。または水俣事件を、四日市の公害事件を、その他いろいろと大企業がおこした事件を想起してもらいたい。これらの大企業の指導者達は、おのれの会社がおこした害を傍観できるはずがなかった。しかし現実に彼等がなし得た仕事といえば、自らの企業をどのように守るか、いかに補償を廉く支払って済ませられるか、いかに事件を上手に隠蔽するか、に全力を集中していただけである。

彼等は、自己の会社の利益を守るためには傍観者になれないが、自分達が流した害で多くの人

が苦しんでいる事実には、まったくの傍観者であった、と言ってもよい。私は、これらの大企業の社員のなかから、自社の害を告発した勇気ある男がいた、というような例はきいていない。これなどは、マキャヴェリズムの作用と反作用のよい例である。いますこし例をあげよう。

最近、欠陥自動車が新聞紙上をにぎわせたことがあった。事故が多発し、あきらかに欠陥がわかっているにもかかわらず、それらの自動車会社の幹部達は、この車に欠陥はない、と言いはった。私は四つの新聞を読み比べ、幹部達の言葉が正確であるのを知り、背筋が寒くなった。彼等は、自社の権益のためには、企業の範囲を限定しない人達であった。この車に欠陥はない、と言いきることにより、この男の地位はその社であがりこそすれ、失墜することはありえない、というのが日本の現状である。

ここにはもはや個は存在しない。企業自体が、この企業に欠陥はない、と言わせているのである。範囲を限定しないから、悪にたいしての自覚がまるでない。単なる技術的欠陥を隠蔽するために、企業全体が悪にたいする自覚を喪失する、といった不幸な事態を招いているわけである。組織の中の人間性の喪失がさけばれたのは久しい以前であった。しかしこのさけびは、日本経済の繁栄にともない、いつとはなしに消えて行った。そして、かつてはさけびをあげていた男が、この車に欠陥はない、という台詞を胸をはって公言するようになった。

今日、大企業の中軸にいる男達の原型(archetype)は殆どこのような人種である。これもやは

りマキャヴェリズムの単なる技術的な問題にすぎないのだろうか、という質問を発したら、彼等はなんと答えるだろう。矛盾をふくんでいたり、曖昧だったり、要するに不明確な状況に対処したとき、彼等の答は常に同じかたちをとる。すなわち、漠然としているから問題は成立しない、と。しかし彼等は不明確な状況を構成する要素を調べても、きまってそれを明確には発表しない。私がさきに述べた、マキャヴェリズムはなにも政治の世界に限ったことではない、と記したのはこの点である。大企業の利潤追求と自己権益の擁護が辿りつく場所はどこだろうか、と考えると、私にはいやな予感がする。限界を逸脱したとき必ず起り得る問題である。

今日、われわれの目前で、おぞましいのは政治だけではない。私は、大企業の利潤追求のおぞましさに、はっきり危険を感じている一人である。いわゆる「大東亜戦争」には目的がなかった、と私は今日考えている。そして、今日のベトナム戦争にアメリカが介入しているのも、アメリカに明確な戦争目的があるわけではない、と私は見ている。このような言辞は左右両方から非難を受けそうだが、私の言いたい事はつぎの点である。

人間の行動には、本能的行動と反射的行動のほかに、もうひとつ特有の行動がある。私はこれを行為とよんでいる。今日の大企業の手段をえらばない利潤追求はこの行為である。この行為には、はっきりした目的と動機がある。この場合、動機はすこぶる意識的で、あきらかに欲望がともなっている。そして、この目的と動機は、利潤追求のために考えぬかれ、いくつかの方法の中

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com